◉共通教材ノート

ロッシーニ作曲

歌劇「ウィリアム・テル」序曲……渡邊學而

――ロッシーニの人気――

1830年10月11日、ワルシャワ国立劇場でショパンが祖国ポーランドを去るにあたっての告別演奏会が行なわれた。その時ショパンのピアノ協奏曲第1番ホ短調が初演されているが、その演奏会の第2部の最初に、ロッシーニの歌劇「ウィリアム・テル」序曲が演奏されている。

これをみると、いつの時代でも、またどこの国でも人々に好まれるポピュラーな作品は同じなのだなあ、と思われるかも知れないが、じつは当時この序曲は、ポーランドではまったく知られていなかったのである。というのも歌劇「ウィリアム・テル」は、その前年の1829年8月3日にパリで初演されたばかりの作品であったからである。それが1年後にその序曲がもうワルシャワで演奏されたというのは、当時ロッシーニがいかにヨーロッパ各地で人気があったかを物語る好例であるといえる。

この演奏会では、このほかにもロッシーニの歌劇「湖上の美人」(1819年　ナポリ初演)の中のカバティーナが、ショパンの初恋の人といわれるコンスタンティア・グワドコフスカによって歌われているが、このショパンの演奏会ばかりでなく、当時のヨーロッパ各地の演奏会では、ロッシーニの歌劇の中の序曲、アリアや重唱曲がそのプログラムの中に採り入れられることが非常に多かった。

たとえば、1824年6月21日、ロンドンのアーガイル・ホールで行なわれたフランツ・リストのイギリス・デビュー演奏会でも、ロッシーニの作品が4曲も演奏されている。当時リストは12歳の少年で、彼が演奏したのはフンメルのピアノ協奏曲など3曲だけであったが、これらロッシーニの作品は当時ロンドンにいた一流の声楽家によって歌われている。この中には、歌劇「泥棒かささぎ」(1817年　ミラノ初演)の中の二重唱「そう、思いますわ」や、歌劇「リッカルドとゾライデ」(1818年　ナポリ初演)の中の三重唱などが含まれている。

*

ジョアッキーノ・ロッシーニは、1792年2月29日、アドリア海沿岸のペサロに生まれ、1868年11月13日、パリ近郊のパシで76歳と8ヶ月余りの生涯を閉じた。遺体は、ショパンと同じパリのペール・ラシューズ墓地に埋葬されたが、その後妻オリンペの遺言により、1887年5月2日にフィレンツェのサンタ・クローチェ教会に移されている。

ロッシーニは、1810年11月3日、18歳の年にベネツィアで歌劇「結婚手形」を初演してから、1829年8月3日、パリで彼の最後のオペラである歌劇「ウィリアム・テル」を初演するまでの19年間に、なんと39曲のオペラを作曲して上演している。単純に計算しても1年に2曲づつの割合いだが、1812年から18年にかけての初期の8年間はとくに多く、全部で27曲がこの期間に作曲されている。ロッシーニが20歳から28歳の若い時期である。しかもこれらの作品は、イタリアで初演されるや否や、たちまちヨーロッパ中に広まっていったから、それだけでもロッシーニの人気の程がうかがえる。

たとえば、シューベルト時代のウィーンでもロッシーニのオペラは圧倒的な人気を博していた。1816年12月には歌劇「タンクレーディ」(1813年　ベネツィア初演)、1817年2月には歌劇「アルジェのイタリア女」(1813年　ベネツィア初演)が上演されたほか、その後次々といろいろなオペラがウィーンにも紹介されている。シューベルトもこれらの作品のいくつかを見ているが、1819年に歌劇「オテロ」(1816年　ナポリ初演)を見た時、シューベルトはロッシーニについて次のように記している。

「《オテロ》は以前の《タンクレーディ》よりもいっそう特徴的である。確かにロッシーニには非凡な才能があることは否定できない。楽器用法もたいへん独創的だし、声楽部も時折この人特有の突飛さはあるけれども、それに劣らずやはり独創的である。」

このころシューベルトは、二つの「イタリア風序曲」を作曲しているが、これらの作品には明らかにロッシーニの影響がみられる。当時の新聞の批評にも、「シューベルト氏の序曲は大好評をもって迎えられた。これはイタリア趣味、ことにロッシーニ氏をモデルにして作られている。」と記されている。

ロッシーニは当時それほど人気のあった作曲家であったから、シューベルトに限らず、多くの作曲家たちに大きな影響を与えているのである。だから現在考えられているよりもずっと大きな存在であったことは確かである。

〔音楽評論家〕